

近年収蔵された 教会史関連文献 4 点



神学部教授 土井 健司

1. エウセビオス『教会史』

イエス・キリストは、どのような顔立ちをしておられたのだろうか。おそらく多くの人が興味を抱くテーマであろう。ただし残念ながら、聖書には一切記述がない。顔立ちどころか、身長や体格についても沈黙する。ところが、ちょっと面白い記事が古代のキリスト教文献にはある。

彼女の家の門口近くの高い石の上には、嘆願する人のように跪いて手を差し伸べている婦人の銅像が立ち、それと向かい合わせに、手をその婦人の方に差し出し、衣を美しく重ね着した同じ材質で[つくられた]男の立像がある。…この像はイエスを模したものであると言われる。

マタイ福音書 9 章 20 節に長血を患う女性をイエスが癒す記事が見られるが、この引用はその後日談となる。この女性はカイサリア・フィリビに戻ると、自宅近くにこの出来事を記念して銅像を造らせたという。現存するものではないので結局は分らないのだが、もし「イエスを模した」というのが本当であったなら、イエスの身長や体格、顔立ちまで分ったかもしれない。地域を考えると、存外いつか発掘、発見されるかもしれない。

この記事は、エウセビオスの『教会史』(*Historiae Ecclesiasticae*)に見出すことができる(第 7 卷 18 章、引用は秦剛平訳[講談社学術文庫]を使用)。パレスチナのカイサリアの監督であった彼は、自身この銅像を見たと言っている。

エウセビオス(265 年頃～337 年頃)は、キリスト教において初めて教会史を執筆した人物である。執筆時期は 3

世紀終わりから 4 世紀はじめ、コンスタンティヌス大帝のキリスト教公認直後までと推定される。10 巻から成る大著である。カイサリアにあったオリゲネスの図書館を利用しており、古文書の引用も豊富で、今は失われた文献もしばしば彼の『教会史』のおかげで参照することができる。ローマをはじめとする各地域の監督表やルグドヌム(リヨン)でのキリスト教迫害といった事件、復活祭論争といった出来事を記す。古代キリスト教史を学ぶ者にとって必読の書であり、また実に内容豊かで面白い。『教会史』は、受肉した神のロゴス(=キリスト)の下での教会の誕生と発展を叙述し、最後にキリスト教の勝利をコンスタンティヌス大帝とともに論じている。またオリゲネスはエウセビオスが生まれる前に亡くなったキリスト教の天才的な思想家であって、エウセビオスは彼を尊敬していたという。『教会史』第 6 巻はオリゲネスについて記した巻であり、現在でもオリゲネス伝を構成する第一級の資料となっている。



エウセビオス『教会史』を取めた最初の印刷本

この『教会史』の最初の印刷本が大学図書館に所蔵されている。1544年にパリで刊行されたもので、ロベルトゥス・ステファヌス（1503年～1559年：仏語名はロベール・エティエンヌ）が校訂し制作した。エウセビオスの『教会史』だけでなく、エウセビオスに続くソクラテスやソゾメノス等の各『教会史』も収められている。これがエウセビオスの印刷本としては最初のものであることは、たとえば標準的な西洋古典学事典の *Der Neue Pauly* の補遺でも確かめることができる。この補遺の第2巻（2007年刊）は近現代における古代の文献誌を扱ったもので、キリスト教に限らず古代の文献の刊行状況を知るのに便利である。「カイサリアのエウセビオス」の項目を引くと、『教会史』の校訂者としてステファヌスが最初に挙げられている。なおステファヌスの名は、彼が1551年にウルガタ訳聖書を公刊したとき、新約聖書の各書に、現在でも踏襲されている章節の区分を導入したことで知られる。「マタイ福音書9章20節」といった言い方ができるのは、このステファヌスのお蔭なのである。



エウセビオス『教会史』巻末挿絵

なお、本書の頁を進めていくと末尾に挿絵付きで *Noli Altum Sapere* と記されていた。ローマ書11章20節のウルガタ訳である。新共同訳には「思い上がってはなりません」とあるが、このラテン語の字義は「高いものを味わおうとしてはならない」。つまり傲慢、高慢を戒めた言葉であって、好奇心を抑制する金言となっている。好奇心というと、今日の大学では学生のモチベーションなど肯定的に捉えら

れているが、この時代は悪徳のひとつに数えられていた。現代でもたとえば生命操作の可能性を目の当たりにすると、好奇心が必ずしもよいとは言えない。とにかく知の宝庫であるはずの本の末尾にこの金言が記されているのは緊張感を覚えて面白い。

2. 『マグデブルク教会史』

同じく西洋の教会史関係の稀覯書として近年大学図書館に収蔵されるようになったのは、通称『マグデブルク教会史』と呼ばれる5冊の本である。宗教改革時代の著作であり、ルター派の立場から編まれた最初の教会史として貴重な文献である。ルター派のマティアス・フラキウス（・イッリクス）が編者となり、複数の学者によって執筆された。ただ本書については未だ通読するだけの閑暇を得ておらず内容については稿をあらためることとし、今は本自体について記してみたい。



『マグデブルク教会史』

装丁は装飾の施された革表紙であって、留め金の跡がある。元来は13巻から成り、巻毎に分けて印刷されたものだが、本書は5分冊に綴じられている。第1冊が最初の3巻、第2冊が第4巻と第5巻、第3冊が第6巻から第8巻、そして第9巻から第11巻を収める第4冊、そして最後は残り2巻を収める。装丁は最初の購入者が制作したものであろう。その制作年代については革表紙に1589年と刻印されている。なお各分冊の表題頁の裏面にはフライブ

ルク大学図書館の印章があり、さらにその下に同じく EX LIBRIS F. SCHLEIERMACHER と印字されていた。即ち近代の解釈学の祖であり、『宗教論』の著者であるシュライエルマッハーの蔵書であったことが確認される。読み進めていくと、シュライエルマッハーの書込みが何か見出されるかもしれない。

装丁とは別に、各巻の刊行はバーゼルの印刷業者ヨハネス・オポリヌスによる。各巻索引の末尾に記されている刊行年を厭わず列挙するなら、第1巻は無記、第2巻は無記、第3巻は1564年8月、第4巻は1560年、第5巻は1562年3月、第6巻は1563年3月、第7巻は1554年3月、第8巻は1564年9月、第9巻は1565年9月、第10巻は1567年9月、第11巻は1567年9月、第12巻は無記、第13巻は1574年1月、以上となる。記載のある巻について1554年から1574年までの刊行と確認されるので、おそらくいずれも初版と思われる。ちなみに第7巻では刊行年について次のように記述されている。BASILEAE, EX OFFICINA IOANNIS OPORINI, ANNO M. D. LIIII. MENSE MARTIO、即ち「バーゼル、ヨハネス・オポリヌス印刷所刊、1554年3月」となる。



『マゲデブルク教会史』第7巻

なお第1巻に附されている表題は次のようになる。『教会の歴史：場所、宣教、迫害、平和、教理、異端者、祝祭、統治、分裂、教会会議、人物、奇跡、殉教、教会外の宗教、そして帝国の政治状況に関して、世紀毎に明瞭な順序によって、キリストの教会の損なわれることのない理想を包含する。格別の愛と信仰によって最

古にして最善なる歴史家と教父、他の著作家から収集したもの。勤勉で敬虔な若干の人びとを通してマゲデブルクの町において〔著された書物〕』（*Ecclesiastica historia, integram ecclesiae Christi ideam, quantum ad locum, propagationem, persecutionem, tranquillitatem, doctrinam, hæreses, ceremonias, gubernationem, schismata, synodos, personas, miracula, martyria, religiones extra ecclesiam, & statum imperii politicum attinet, secundum singulas centurias, perspicuo ordine complectens: singulari diligentia & fide ex vetustissimis & optimis historicis, patribus, & aliis scriptoribus congesta: Per aliquot studiosos & pios viros in urbe Magdeburgica*）である。以後の巻の表題は内容に応じて若干異なっていくが、基本は変わらない。

各巻は百年単位で執筆され、第1巻は紀元1世紀、第2巻は2世紀を扱う。百年単位で区切られているのだが、各巻の内容は年代順に記されているわけではない。主題別になっていて、百年の間に宣教や迫害の様子、また教義など論述されている。この点については第1巻に「この史書の方法」（*Methodus Historici Operis*）が付してあり、全体に通ずる論述の仕方が説明してある。ちなみに第1巻の2章は「教会の場所と宣教」、下位項目としてアジア（もちろん小アジアのこと）、アフリカ、ヨーロッパが含まれる。3章は「教会の迫害と平和」、4章は「教会の教理」であって、その下位項目として例えば「神の御言葉」、「信仰」が叙述されている。

一般にプロテスタントは「聖書のみ」（*Sola Scriptura*）を標語のひとつにするので、文字通り聖書のみが大事であり、歴史は重要ではないかのように思う人がいる。しかしルターが「聖書のみ」と述べたとき、A・マクグラスが『宗教改革の思想』で指摘したように、古代キリスト教において与えられた一定の解釈を含めている。さもないと、例えば再洗礼を禁じて洗礼が一回限りということにならない。アウグスティヌスをはじめとする5世紀までの教父の解釈を前提としたうえで、「聖書のみ」を語るのである。ちなみに古代キリスト教作家のことを教会の父、即ち「教父」と呼ぶが、その教父を扱った *Patrologia*（教父学）という学

問名称のはじまりは、意外と、伝統を重んずるカトリックではない。それは17世紀のルター派の学者ヨハネス・ゲルハルトの同名の書に遡る(1653年)。この一事をもってしても、決してプロテスタント(の主流派)が単純に「聖書のみ」を述べたのでないことは明らかであろう。



『マグデブルク教会史』第1巻(第1冊に収蔵)

Magdeburg(マグデブルクの年代記者)の項目があるので紹介すると、「この本は編者マティアス・フラキウスの厳格なルター主義と反教皇主義によって統括され、次第に教皇のアンチ・クリストの支配のもとに來り、最後はルターによって解放される新約の純粋なキリスト教を描いている」とあった。

ところで、各巻表題の頁にはイルカに乗ったギリシアの抒情詩人アリオンの姿が描かれている。「運命はそれぞれ道を見出す。アリオンよ、徳にとってはいかなる道なき所も道である」(Fata viam inveniunt. Arion invia virtuti nulla est via)。挿絵は各巻表紙に記されるが、この銘は第5冊の各巻タイトル頁に記されている。第1冊を眺めているときには不思議に思ったが、第5冊を繙いて合点がいった。紀元前6世紀のアリオンはオルフェウスに次ぐ詩人であり、その歌の美しさに魅せられて海中の魚も水面上がってきた。アリオン自身、海中に投げ出されたとき、歌によってイルカに助けられたという(挿絵)。なお挿絵のアリオンが手にしている楽器が古代ギリシアの豎琴ではなく、バイオリンなのは興味深い。

3. ルナン・ドゥ・ティルモン『メモワール』

上記はいずれも16世紀の文献資料であるが、17世紀末のルナン・ドゥ・ティルモンの『メモワール』も近年揃えることができた。1693年から1712年にかけてパリで刊行されたもので、全16巻の『メモワール』は教父研究の金字塔とも言うべき文献である。正確なタイトルは『最初の六世紀の教会史のための覚え書』(*Mémoires pour servir à l'histoire ecclésiastique des six premiers siècles*)という。もう20年も前に学位論文をまとめるため4世紀のギリシア教父ニュッサのグレゴリオスの研究をしているとき、研究史を執筆するため『メモワール』の当該箇所を読んだのが最初の出会いであった。つまり教父研究を行う際に、先行研究として最初に挙げられる文献のひとつが『メモワール』なのである。

『メモワール』の著者は通例「ティルモン」と呼ばれるが、



『マグデブルク教会史』第12巻(第5冊に収蔵)表紙挿絵

この本の特長については反ローマ教皇の立場から著された、純然たるプロテスタントの教会史だといわれる。なにぶん読んでいないので自分では確かめられないのだが、手元にあった *The Oxford Dictionary of Christian Church* (第3版) を引いてみた。そこに Centuriators of



ルナン・ドゥ・ティルモン『メモワール』

正確にはルイ・セバスチャン・ルナン・ドゥ・ティルモン（1637年～1698年）である。ティルモンはパリ東部の村であり、この人物の出身地だという。ポール・ロワイヤルに学んだ学者であって、ヤンセニズムとの関係も深いものがあったようだが、論争には関わらなかった。ギリシア語写本やラテン語写本を研究する古典学者ではないが、数多くの教父文献を渉猟した読書人であって、『メモワール』は彼が生涯を費やしてものにした名著である。エドワード・ギボンも『ローマ帝国衰亡史』を執筆するときに参照したという。人物本位で構成され、その論述は今日でも啓発的であって頷くところがある。

例えばここ数年わたしは古代キリスト教における救貧の問題を研究しているが、ティルモンはなんと書いているのかに興味をもつ。

大バシレイオスと言えば、カッパドキア教父のひとりであって、教理論争、教会政治、修道制の確立などで顕著な業績を残したが、歴史上はじめて病院を建設したと評価されるギリシア教父である。医学史、病院史の本を繙くなら大体そのような評価である。「レプラ」と呼ばれた病気を患う病貧者は、当時社会のなかで嫌われ、人間扱いされず、差別されていたが、大バシレイオスはこの人びとのための病院を作った。また飢饉のおりには餓死者が大勢でるなか、食糧調達に奮闘したことも伝わる。キリスト教の伝統において「貧者」（ギリシア語の πτωχός, πένης）という概念は、文字通り「貧しい」という経済的な概念というよりも、むしろ社会的・法的な次元を含むものであって、差別され抑圧され、理不尽な扱いを受けた人びとのことを指す。こ

の人びとに眼差しを向けて闘い行動したのが大バシレイオスであった。『メモワール』第9巻の「聖バシレイオス」の第51項「バシレイオスの貧者への配慮：病院と教会を建てさせたこと」に関連記事がある。冒頭ティルモンは「司教に最もふさわしい称号のひとつが、ユスティノスに従って『貧者の配慮者』、『貧者の世話人』であるなら、聖バシレイオスほどこの称号にふさわしい聖人はまずいない」と記す。「ユスティノスに従って」とは、2世紀の弁証家ユスティノスの『第一弁明』67章7節にある「監督は…窮乏するすべての人にとり援助者となる」を指すのであろう。バシレイオスについては十分な評価と思われた。

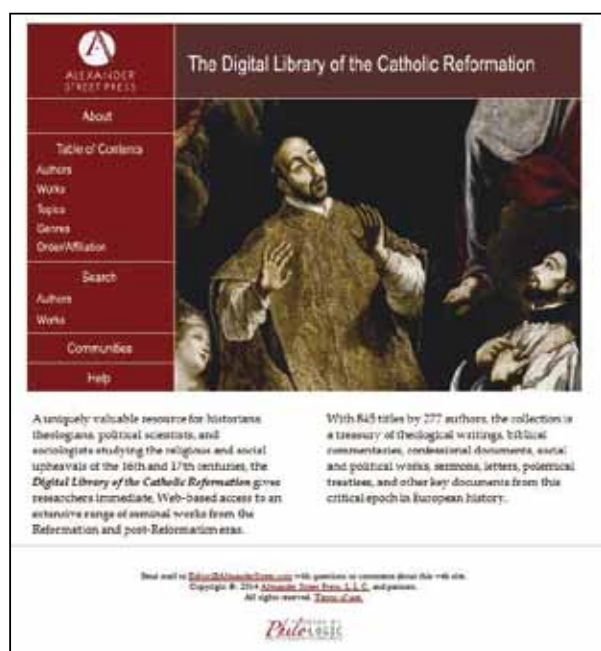
4. The Digital Library of the Catholic Reformation

最後は本ではなく、ウェブ上で閲覧できる The Digital Library of the Catholic Reformation を紹介したい。

このデジタル・ライブラリーは主に対抗宗教改革期のカトリック教会における250名程の学者・教会による800余りの文献を収めている。トリエント公会議文書、イグナティオ・デ・ロヨラやフランシスコ・ザビエル、フランシスコ・スアレスやカエタヌス、またヨハン・エックやエラスムスなどはもちろん、哲学者のパスカル、その他貴重な文献が閲覧できる。

一つひとつ紹介することは到底望めないが、たとえばジャン・マビヨン。ウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』の

序言冒頭に言及される古文書学の大家である。否、大家どころか、マビヨンこそがラテン語の古文書に関する体系的研究をまとめた古文書学の創始者なのである。ベネディクト派のサンモール修族のひとり、すなわちモーリストである。特にその『真正なる文書』(De re diplomatica:1681年)は古文書の鑑定識別法を論じた記念碑的な著作として知られる。(ちなみに、驚いたことに『ヨーロッパ中世古文書学』[宮松治憲訳]と題された邦訳が公刊されている。)



データベース：The Digital Library of the Catholic Reformation

また以前、安楽死や尊厳死に関してキリスト教思想の歴史を調べていると、宗教改革以後のスペインのカトリック系倫理神学者が重要であることに気がついた。カトリック神学における倫理に関しては、中世の神学者トマス・アキナスの『神学大全』第Ⅱ部のⅡが標準であって、当時大学では教科書として使われ学ばれていた。近世になると具体的な問題に照らしてこの『神学大全』に注釈が施されていく。そのなかで治療停止の是非について「特別手段」(media extraordinaria)と「通常手段」(media ordinaria)といった区別が立てられるのだが、これらはスペインのカトリック神学者の思想であった。麻酔のない当時は外科手術が拷問に比されていた時代である。耐え難い苦痛、高価な薬剤などを伴う特別な場合は、治療を受ける義務を免除する

ことがその意図するところになる。なぜなら可能な治療を拒否することは自殺に等しく、来世での劫罰が待っている。そこで「特別手段」は義務ではないとしたわけである。こうした理論を構築していったのが、フランシスコ・デ・ヴィトリア、ドミンゴ・バニェス、ドミンゴ・デ・ソトといった神学者である。しかしその著作は入手しがたく、日本に存在しない文献がいくつもある。このライブラリーにはそれらの著作も収められていて、文書閲覧はもちろん、検索機能も付いているので大いに助けられた。

以上近年収蔵されるようになった教会史関係の文献を紹介してきた。周知のようにキリスト教には2000年の歴史があって著された文献数は膨大である。私などが目を通すことのできるものは限られており、ほんの僅かに過ぎない。そう言えば、『折りたく柴の記』において江戸時代の儒学者の新井白石は「しかし、すでに出仕の身であったから、書物を勉強する時間もなかった。それ以前はいつも貧乏で、適当な本を人から借りて読み・・・」(桑原武夫訳)と語っていた。この言葉が身に沁み入る今日この頃である。仕事をしつつ、しかしできるだけ暇を見つけて読書に励みたい。

土井 健司(どい・けんじ)

関西学院大学神学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都大学博士(文学)、関西学院大学博士(神学)、現職 関西学院大学神学部教授。日本基督教学会理事、日本宗教学会理事、宗教哲学会理事(学会誌編集委員長)、キリスト教史学会理事、日本生命倫理学会理事、NCC宗教研究所所長。

著書 『神認識とエベクタシス』(創文社、第9回中村元賞受賞)、『キリスト教を問うおす』(ちくま新書)、『キリスト教は戦争好きか』(朝日選書)、『古代キリスト教探訪』(新教出版社)、『司教と貧者』(新教出版社)、『愛と意志と生成の神』(教文館)、『宗教と生命倫理』(共編著、ナカニシヤ出版)ほか多数。